次第

月乃都を忍も出づる〱

月氏の國を尋ねん

詞

是ハ栂尾の明恵法師にて候我入唐渡天乃心ざしあるによつて暇乞の為に春日の御神ゑ參らばやと思ひたゞ今南都に下向仕候

歌上

此岩山志きみか原をよそにみて〱

月はなしひの影乃松原の空も
も関越乃山を詠よりて見し
南北路やなかへ振越て三笠山
衣は秋里に濃よにくわしく
暁する空に向へば和光乃ひか
あふたなわ　うつ山は霧なる
形を現しては古々に至る神慮を

ありし里は安濃ちまたを
ミ招て人皆長久乃あかつき
保まミ那も久堅の天児屋根乃
世々とも屋　月はた底のけも
由底乃二柱　清社乃ちかひも
吉那らとも　荒ツく神の代
まわ秋末すぎてはじめ家水屋乃

みのをまんさらわ小ましり於神
さらゝ掛ご三盤子於康乃松風も枝を
なりさし奴宰名かく　四字詞　いつ小
菅原乃室清こに申へ参る事流る
三字詞
庭乃於是梅花の所恵上人まて
傍座人そやだく所方乃清宗福
ござらう神通よ嫉炎思召人る母

半
こそは昨日宗祐申事候の段よ
あらはれ我へ唐渡天乃ことさらし
あるまじわざ候間介流る為の口ゝぞ
参らすは　三テ　是ハ何よりも人共
ござらう上人の候子余所嫉よわ
四季折ゝ此御宗祐乃附花の
かゝ流らうぬ事をうまく猫に見ふ

然るに入唐渡天といふも仏法
流布の跡とめし古跡を拝まむ
為なりし天台山を拝むべく
ば比叡山にまいり給へ五臺山の
望あらば芳野築波を拝み給へ
昔ハ霊鷲山今ハ衆生を度せん
とて大明神と示現し此山に

宮居し給へは即ち鷲の御
山とも春日の御山を拝み給へ
我をさまた衆生在仏世に出て
さりや名もよ月氏の我照しとは衣
清神仏もありたなわざりし大
ちりひなる無心業行の神道の
迷ひを照らし遊ばすやばん後の

流き乃道なきを出し給ふ法
瓔珞細輭の衣を脱ぎ常弊垢
衣を着し　はじ四諦乃法、法を
説給ひし　鹿野苑もここなき座
春日野よりなふ遊ぶ鹿乃その
ならん座　平に當社の有様の
山は三笠にのきさしやばね

うるさゝに影まそ誓ひを四方に
まね醍醐乃みやちもすはある座
むさしわな鷲西の大寄月ほえ宮
光りまのゑ法七大寺法の華も
八重桜乃み座ことて春日盛り
散らうちとけのわかるよ
ち紫なにてかな見を法神託さ

なれハみなかく時は
大地震動するは下界の龍神
の参会なり　は八大龍王よ
難陀龍王　跋難陀龍王　娑伽
羅龍王　和修吉龍王　徳叉迦
龍王　阿那婆達多龍王　百千
眷属引連れ〳〵て　平地に波瀾を
たてゝ仏乃会座に出来して
御法を聴聞する　その外妙法
緊那羅王　また持法緊那羅王
楽乾闥婆王　楽音乾闥婆王
婆稚阿修羅王　羅睺阿しゆら
王の随類乃眷属ひきつれ〳〵て
是も同じく座列せり　龍女が立

まふ渡濁の袖ッく白ぬなきや
紀田の原乃けり梅気白玉立見て
みと里のてらしう清き海原や
だおおきくもわ月の見ゆる浪
佐保の川にうひ出ます
八大龍王八大龍王の力を
かようふ巻雨はあまね聖の月乃

三笠の山やまさと此此聖雪も
出でみよや摩耶の誕生樂の
悦讃嘆乃入滅をなかて見
さながらや恵上人その唐は
とまの庵渡天の小
かようまし梅佛跡は見ぬ
まやなよもく此上

おし藤くもに乃まて龍女い
南方にとひさるまゆけた龍神也
猿沢の池乃青波くそく宿
それなけ千尋の大蛇とあ清て
天に満つるま地をまたりまうま
て池水をこのんしそ先小くわ